

——伝統工芸の名匠——

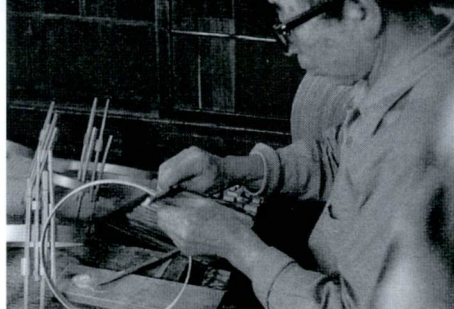
うるしを現代にいかす

# 曲輪造・赤地友哉





曲輪の制作



この映画は、人間国宝・赤地友哉の制作過程を通して、ひたむきな情熱と研鑽、基本の尊さを、人の生き方に重ねあわせ、長い歴史の中で培われてきた伝統工芸の継承と創造を世に問う作品である。

赤地友哉、昭和49年重要無形文化財「髹漆<sup>きゅうしつ</sup>」の保持者に認定される。74歳一  
盆に黒漆が塗られていく。……友哉のおだやかな表情とダイナミックな刷毛の動きが対  
照的である。友哉独自の曲輪造<sup>まげわづくり</sup>の技は、漆器の反りや歪みとのあくなき戦いから生まれた  
ものである。金沢生まれの友哉には、加賀文化の伝統と風土が根づいている。

友哉は、何ごとにも基礎を大切にす。寸分の狂いもなく作り続けられる曲輪には、ひ  
たむきな生きざまと人生の重みとが重なり合い、見る人の心を打つ。

幾重にも塗っては研ぎ、漆塗りの味わいを深めていく。漆は酸にも強く、アルカリにも  
強い。化学塗料では味わえない光沢を放つ。塗りの段階での敵は、チリだと友哉はいう。  
細かなチリを丹念に一つ一つ取り除いていくのは根気のいる作業だ。

仕事がひとくぎりつくと美術館を訪れる。東京国立近代美術館。友哉・曲輪造の新たな  
歩みをしめす記念すべき作品とのひさかたぶりの対面である。日々勉強、日々学びだと友  
哉はいう。また、友哉は日本の代表的な工芸技術を、次代を担う若者達に伝えていかなけ  
ればならないという使命感に燃えている。石川県立輪島漆芸技術研修所の研修生との対話  
には作ることで育てることが一体となった友哉の情熱がみなぎっている。

友哉の制作過程には、親と子、夫と妻の情愛を彷彿させるものがある。いつくしみ、鍛  
え、磨きぬかれた心と技は、伝統を守るとともに創造に跳んだ友哉の軌跡である。

漆器を作る側と使う側の心の通い合いこそ友哉の願いであり、次代への架橋なのである。

## 漆工芸一覧

【髹漆<sup>きゅうしつ</sup>・飛騨春慶塗、能代春慶塗、塗りたて<sup>はなぬり</sup>（花塗）、呂色塗（研出し）、根来塗<sup>ねころ</sup>】**【変り塗**・津  
軽塗、若狭塗、竹塗】**【蒔絵**（末金鏤<sup>まきえ</sup>）・研出蒔絵、平蒔絵、高蒔絵、肉合研出蒔絵、錆上蒔絵、  
墨絵研切り蒔絵、黒蒔絵、蒔朱絵、色粉蒔絵、友治蒔絵、木地蒔絵】**【地蒔**・平塵（塵地）、沃  
懸地、梨子地、平目地、村濃地】**【平文**・金平文、銀平文、箔絵、切金、卵殻、杣田、白檀塗、  
堆錦、瑤瑁】**【螺鈿**・螺鈿、揆鏤、芝山細工、象嵌】**【線彫**・沈金、薺醬、存清】**【彫漆**・堆朱、  
堆黒、紅花緑葉】**【疑似彫漆**・村上堆朱、鎌倉彫】**【素地地下**・金剛石目塗、本堅地（輪島）、  
しぶ下地、乾漆、藍胎漆器、一閑張、豚血下地（沖繩）]





上塗り



## 赤地友哉、人と作品

岡田 譲 (元、東京国立近代美術館館長)

たいへんもの静かでおだやかな人柄である。

氏と話をしていると、ねばり強さ、芯の強さというものが、確信に満ちた言葉の端々に感じられる。あるいは、これは生れた土地、金沢産の人たちに共通のものかもしれない。そういえば、郷里の漆芸の大先輩に当たる松田権六氏にも、ことにそのねばりの点で似たところがある。

もっともそうした性格は、北国の風土が育てあげたものでなく、漆芸そのものが背景になっているのではなかろうか、反りや歪みの出ない素地作りから始まり、何十回となく、素地の上に漆を塗っていく作業。根気とねばりをなくしては出来ない仕事である。

漆芸作家に芯のつよい性格の人が多く見うけられるのも、仕事の性質によるところが大きいと云えるようである。

赤地友哉氏は素地作りに全神経を集中する。素地の良し悪しが、その作品のかなりの部分を左右するからである。そこには何事にも基礎を大切に<sup>まげわづり</sup>する氏のひたむきな生きざまをほうふつとさせる。反り、歪みが少ない素地作りにはじまる<sup>まげわづり</sup>曲輪造には、氏の人生哲学が生きざいでいる。

氏が漆芸界で注目されはじめたのは、昭和32年あたりからである。昭和35年の「日本伝統工芸展」に出品された<sup>まげわづりさいしつもりき</sup>曲輪造彩漆盛器が世間の注目をあび、氏の評価を高めることになった。漆黒の円を金と緑の太い線が交互に取り巻くという単純明快なデザインである。その太い線は<sup>ろくろ</sup>轆轤による切り込みでなく、<sup>まげもの</sup>曲物でつくったというところに着想の斬新さがあった。

今回の映画でとりあげる、<sup>まげわづりあらいしゅまりがたじきろう</sup>曲輪造洗朱毬形喰籠は、昭和55年「人間国宝新作展」に出品されたものだ。曲輪造彩漆盛器以来の曲輪物の集大成ともいべき現代的な香りが豊かに感じられる秀作である。その緊張した器体からは、漆器を現代にいかし、未来の創造にたなげようとする赤地友哉氏の意気込みが力強く発散する。

「髹漆」とは漆塗のことで、その技術は、<sup>まじ</sup>髹地の材料の選択・<sup>したじ</sup>造型から、<sup>かぬり</sup>漆塗りの下地法や上塗法に至るまで広範囲である。

赤地友哉は、髹地づくりは木工の<sup>まげもの</sup>曲物を応用した<sup>まげわづり</sup>曲輪造、漆塗は塗りたてを特色としている。

「塗りたて」は漆特有の光沢をいかし、刷毛跡にも美しい構成を配慮したものである。



作 品 名・シリーズ—伝統工芸の名匠—

うるしを現代にいかす

まげ わづくり あかじ ゆうさい  
「曲輪造・赤地友哉」

(35ミリ・カラー・31分)

企 画 製 作・財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製 作 協 力・日本テレワーク株式会社

製作スタッフ・監 修・岡田 譲

プロデューサー・六鹿 英雄

脚 本・監 督・木村 正美

撮 影・住田 望 照 明・加藤 純弘

録 音・吉田 一明 編 集・松本 ツル子

音 響・山崎 宏 効 果・滝沢 修

製作担当・保坂 孝雄 ナレーター・川上 裕之

協 力・文化庁文化財保護部

東京国立近代美術館

京都国立近代美術館

金 沢 市

石川県立輪島漆芸技術研修所

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

公益財団法人 **ポーラ伝統文化振興財団**

<http://www.polaculture.or.jp>

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル

TEL 03-3494-7653 FAX 03-3494-7597

P1/K1@1,000.17.8